

VIIIまとめ

今回の調査は、これまでの京内遺跡の発掘調査がいずれも京の北半分で行われたものであるのに対して、京の南端に近い八条で実施されたものである点に新しさがあ
り、また調査規模も、八条三坊の4つの坪にまたがって
いて、広範囲に平城京のまちの様子をうかがうことが
できた点で、画期的な調査であったといえる。しかもこの
坊は、平城京の重要遺跡と目される東市の所在するところ
であって、その周辺の状況をさぐる意味でも注目すべき
内容をもっている。検出した遺構や遺物は、豊かかつ
多量であり、その詳細な検討は今後にまきたいが、既述
のような調査成果の概要をもとに、以下若干のまとめを
行なって、今後の京の調査研究の資料としたい。

坪境の小路 4つの坪を仕切る小路は、東西小路、南北小路ともに、側溝心距離をはかると6m(20尺)になり、これまでの調査例—左京三条二坊、右京一条二坊の例—とほぼ同じ結果がえられた。ただし、今回検出の小路側溝は、一方の溝幅を広くとって主排水路としている点が従来のものと異なる。

堀河 三坊の九・十坪列のほぼ中央を南北に貫流する幅約10mの堀河は、従来からこの筋に南北に通る細長い水田地割がある点で注意されていたが、今回の調査でそれが堀河であることが確認された。東堀河については文献上から、東市の西隣の坪を二丈の幅で流れていたものと考えられてきたが、今回の調査で検出したものは、河幅にしてその二倍近い規模があり、東堀河の本流と考えられるものである。しかもそれは市域内を貫流しているわけで、平安京の堀河が、市域の両側の大路上に通っている例とは異なる。因みに、平城京の西堀河(現秋篠川の流路)も坪のなかを貫流しており、これらがどのような事情によるのかは今後の検討課題である。

宅地割り 九坪・十坪は堀河で東西に2分されている

が、今回の調査でその東半部の状況を知ることができた。まず九坪についてみると、これを画する施設としては、南に掘立柱塀があり、東南部で若干北にまわる。坪内は、遺物を含む東西の細溝でわけられる。それによって九坪東半部は、第II期において南から $\frac{1}{6}$ 町、 $\frac{2}{6}$ 町、 $\frac{3}{6}$ 町、 $\frac{4}{6}$ 町に区切られるごとくで、その区分ごとに、井戸が一基ずつあり、建物群もこの単位で一定のまとまりをもつようである。しかし第IV期の奈良時代末には細溝で限られる宅地割りは認められなくなり、上記の区割りがみだれてくる。各敷地の入口は、これが東西に長い地割であるから、東あるいは西のいずれかであろうが、西は堀河に面するから、東を入口とする可能性が高い。坪の東辺に、小路に沿って幅4mほどの溝で限る道路状遺構があるが、これは坪にはいって、各敷地に通ずる小径であろうか。坪の東を限る遺構は確認されていないが、簡単な生垣様の施設でも想定すべきであろう。

敷地内の建物は、数回におよぶ建替えがあるから、一時期についてみると、入口近くに井戸と雑舎があり、奥に主屋と二、三棟の付属屋がある程度で、堀河寄りの未発掘地を加えて勘案しても、せいぜい4~5棟の建物に限られるようである。建物規模は、同様な傾向をもつ十坪、十六坪の例を加えて集計すると、桁行柱間数では2間が14棟、3間が46棟、4~6間が15棟となって、3間以下が8割以上を占め、廂付き建物は4棟に限られる。柱間寸法は4~10尺であるが、そのほとんどが桁行7尺、梁行6尺で、かつ完数値をとらない不揃いなものが多い。このような傾向は、左京三条二坊十五坪、左京一条三坊十五・十六坪の調査例と比べると格段の差があり、左京五条一坊四・五坪と比べても小規模であり、同時代の地方集落遺跡の建物に近いものである(末尾の平城京発掘調査一覧を参照)。建物規模に限らず、建物配置もまた、

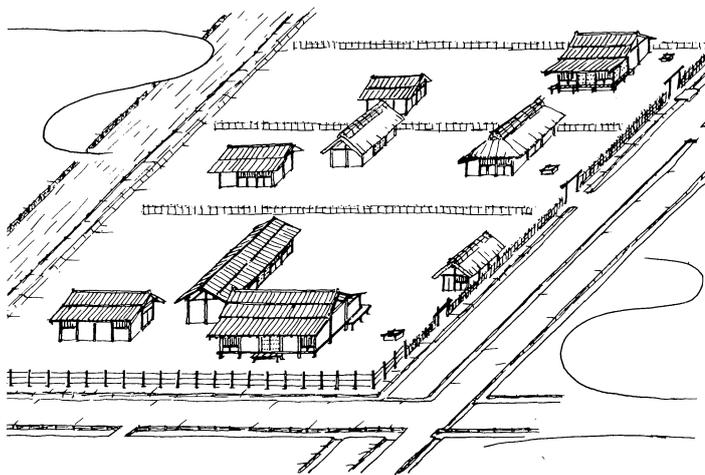
道路に面して建てられている平安京以降の町屋とは様子が異なっており、農村風の建物がそのまま都のなかに宅地を与えられて建っている観がある。

十坪 坪の東北部をごく一部発掘したにすぎないが、坪内の状況は東辺に道路状遺構があり、敷地の東寄りに井戸がならぶなど、九坪とよく類似している。文献上から、十坪は東市の一部と推定されているが、今回の調査で検出され遺構・遺物からは、この坪を東市内とする決め手は見出しえなかった。むしろ、九坪と遺構のあり様が類似していることは、ここを市内とみることに否定的な材料ですらある。しかしながら、九坪と十坪を境する小路の南側溝から、多種多様の遺物が極めて多量に出土したことや木簡のなかに品物の売買を示すものが含まれていることなどは、この地域が市と深いかかわりをもつ場所であること示していよう。調査地が十坪のごく一部に限られていることもあり、今後の調査をまって判断すべきものとする。

寺院 十五坪で検出した寺院は、出土瓦から見て、白鳳期にさかのぼるものとみられるが、今回発見された

諸堂および僧房と、天神社境内地の土壇状の高まりを金堂跡とみれば、条坊制の一町内におさまる伽藍配置が考えられ、条坊設定時に、別な場所から移建されたものとも考えるべきかもしれない。寺の名称は、SD1155から出土した「土寺」なる土器の墨書銘が注意される。土寺は土師氏との関連を考えるべきであろう。本寺の廃絶期は、僧房と講堂の雨落溝から出土した10世紀後半の土器や、少量ながら出土した鎌倉時代の瓦が目安になり、13世紀末の『西大寺田園目録』にみえる「ヒメタウ」は、その頃まで一部の堂舎が存在していたことを示していよう。平安京の近世の絵図には、東市の近くに市姫金光寺（あるいは市堂、市姫祠）があるが、「金光寺縁起」によればそれは市の守護神としてまつられたものであるという。平城京の「姫寺」「ヒメタウ」もそれとの関連を考えさせる。

なお、条坊遺構に先立つものとして、十坪、十五坪にまたがる東西溝SD1380がある。この溝は平城京南辺条里の南端からはかって1,325mの位置にある。京造営前の先行地割に関連した遺構とみられる。



九坪の宅地と建物の復原図

平城京の発掘調査に関する文献（抄）

平城宮東南隅外の調査	奈良国立文化財研究所年報	'66
平城宮東院西南隅外の調査	同 上	'67
平城宮東院東南隅外の調査	同 上	'68
平城京左京二条二坊六坪の調査	同 上	'71
平城京左京二条五坊北郊の調査	公立学校共済組合	'71
平城京羅城門跡発掘調査報告	大和郡山市教育委員会	'72
国宝唐招提寺講堂修理工事報告書	奈良県教育委員会	'72
平城京朱雀大路発掘調査報告	奈良市	'74
平城京左京一条三坊の調査	奈良国立文化財研究所学報	'75
平城京左京三条二坊十五坪	奈良県立橿原考古学研究所	'75
平城京左京三坊二坊	奈良国立文化財研究所学報	'75
西隆寺	西隆寺跡調査委員会	'76
平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報	奈良国立文化財研究所	'76